



(2005年11月)

## 【学会活動状況】

### 1. 研究会開催報告

#### ①第2回植物病理学会教育プログラム「植物病害の診断・同定プログラム」

第2回教育プログラム（実行委員会：加来久敏・塩見敏樹・高橋賢司・難波成任（代表）（アイウエオ順））が平成17年8月15日（月）より19日（金）まで5日間にわたり、東京大学大学院農学生命科学研究科（東京都）で、20名の参加者を対象に行われ、無事終了した。初日は9時45分から道家紀志学会長の挨拶があり、10時より講習会が開始された。午前中の2時間は岸 國平講師による「植物病害の診断法」、午後は4時間にわたり小林享夫・月星隆雄両講師による「病原糸状菌の分類・同定法と分離培養・検鏡等の実習」が行われた。17時からは懇親会が農学部生協で行われた。2日目は9時30分より17時まで飯嶋 勉・手塚信夫・宍戸雅宏講師らにより「土壌伝染病の診断・同定法」・「土壌病原菌の分離・培養法とその実習」が通して行われた。3日目は午前中、佐藤豊三講師により「病原糸状菌の分類・同定法」の講義が、午後は大畑貫一・對馬誠也両講師により「病原菌の接種・保存法とその実習」が行われた。4日目は午前中、西山幸司講師により「病原細菌の診断・同定法」の講義が、午後は畔上耕兒・松浦貴之両講師により「病原細菌の分離・同定法とその実習」が行われた。夜はスケジュールには無かったが、受講者に加え畔上・松浦両講師や東大病理研のメンバーも参加して根津に繰り出し、交流を深めた。最終日は9時30分から15時まで瀧川雄一・落合弘和両講師による「PCRおよび血清を用いた植物病原細菌の診断同定とその実習」、続いて松山宣明教育プログラム推進委員による総括が行われた。最後に実行委員会を代表して高橋賢司委員より挨拶があり、松山委員から受講者に修了証が授与された。講習会終了後しばらく受講者は別れを惜しみつつ歓談したのち散会し、無事終了した。今回の特徴は大半の講義・実習で液晶プロジェクターが駆使され、大量の生材料による実習が大半を占めたこと

である。今回は都心で開催されたため、宿泊は自由であったが、一部相部屋で宿泊した参加者もあった。また毎晩キャンパス周辺で交流が暖められたようである。受講者の多くは、知り合いが一気に増えたことと、講師とも知り合いになれ、帰郷後すぐにメールのやり取りを始めた受講者もいたようで、本プログラムの大きなメリットの一つとなったようである。参加者は北海道から沖縄まで18県に亘り、大半が県農業試験場からであったのが特徴で、それだけニーズが高いことを示しており、今後の運営上参考となろう。なお、参加申込は熾烈を極め、申込開始後直ちに定員に達し、申込者は60名以上にのぼった。（難波成任）

#### ②第41回植物感染生理談話会

本年度の植物感染生理談話会は、平成17年8月18日～20日に高松市サンポートのシンボルタワー内かがわ国際会議場において開催され、100名を超える研究者・学生諸氏のご参加を頂いた。植物種や品種レベルで特定の病害に対する感受性・抵抗性が明確に分かれる「宿主特異性」をテーマにして、新進気鋭の若手・中堅研究者を中心に、最新の研究成果・これまでの研究経緯を取りままとめてご紹介頂いた。講師の先生と演題を以下に示す。豊田和弘氏「サブレッサー研究のこれまでとその将来展望」、吉岡博文氏「抵抗性遺伝子を介した防御応答におけるシグナル伝達機構」、川崎 努氏「Gタンパク質を介した病原体認識と耐病性シグナリング」、三瀬和之氏「プロモウイルス感染における宿主特異性決定機構」、高橋英樹氏「キュウリモザイクウイルス—シロイヌナズナ系におけるNBS-LRR遺伝子ファミリーの発現・機能解析」、石川雅之氏「トバモウイルスRNAの複製機構」、児玉基一朗氏「植物病原糸状菌における二次代謝産物生合成と病原性—ポリケチドおよび環状ペプチドを例にして—」、山本幹博氏「宿主特異的毒素を利用した植物の病原体応答解析」、柘植尚志氏「*Alternaria alternata* 病原菌の宿主特異的毒素生合成—デカトリエン酸エステル毒素を生産する病原菌について—」、曳地康史氏

「*Ralstonia solanacearum* の病原性遺伝子発現のグローバルな制御」、一瀬勇規氏「*Pseudomonas syringae* の宿主特異性と非宿主の抵抗性」、蔡 晃植氏「イネによる植物病原細菌 *Acidovorax avenae* の分子認識機構と免疫反応誘導機構の解析」、渡辺雄一郎氏「ウイルス感染応答研究から生物学に発信できること」、久保康之氏「植物-病原菌の細胞間コミュニケーションと特異性」、久能 均氏「分子生物学研究に望むこと—細胞学の視点から—」。また、「希少糖研究の現状と展望」という題目で、香川大学希少糖研究センター長の何森 健氏に、文科省の知的クラスター創成事業で推進中のプロジェクト概要についてご紹介頂いた。さらに、ポスターセッションでは若手研究者や大学院生を中心に30題の発表があり、ベストポスター賞（3題）が授与された。会期を通じて活発に討議がなされ、盛会の内に全日程を終了することができた。次期開催は島根大学が担当であることが、幹事会で了承された。（秋光和也）

### ③第23回植物細菌病談話会開催地報告

南国特有の強い日差しの下、9月29～30日に第23回植物細菌病談話会が高知市夜須町の「ホテル海辺の果樹園」で開催されました。今回の植物細菌病談話会では、「青枯病防除体系の構築を目指して」と「細菌の環境適応と病原性」の2つのセッションをもうけ、それぞれの分野の第一人者の先生方に13題のご講演をいただきました。とくに、「青枯病防除体系の構築を目指して」では、青枯病抵抗性育種について3題ご講演をいただき、植物病理と耐病性育種の共同関係の重要性について再認識させられました。さらに最近のトピックとして、「ウリ類果実汚斑細菌病の現状と撲滅戦略」について駒田 且先生から貴重なご講演をいただき、種子伝染性細菌病防除戦略についてご示唆をいただきました。また南澤 究先生には、ゲノム解析から共生細菌と植物の相互作用に至る膨大なかつ綿密なデータを基に、「共生窒素固定細菌の環境適応」についてのご講演をいただきました。特別講演として、古澤 満先生から、日本発の新たな進化論「不均衡進化理論と微生物の環境適応能力」についてのご講演をいただき、植物細菌の病原性進化研究に新たな息吹を吹き込んで頂きました。日本各地からお集まりいただいた94名の参加者が終了時間を忘れて、熱心にご討議頂きました。とくに、第一日目の隠れセッション「植物細菌病研究の楽しさ」では、前半はプールサイドで「ホテル海辺の果樹園」自慢の地ビールを片手に、そして後半は、夜半過ぎまで土佐の地酒を酌み交わしながら熱い討論が続けられました。数多くの皆様の厚いご援助を頂き無事に談話会を開催することができましたことを、

この場を借りて厚く御礼申し上げます。次回はつくば市で開催されますことを最後に報告させていただきます。

（曳地康史）

## 2. 部会活動状況

### (1) 部会開催状況

#### ①北海道部会

日 時：2005年10月20～21日

場 所：北海道農研センター（札幌市）

#### ②東北部会

日 時：2005年9月26～27日

場 所：弘前大学（弘前市）

#### ③関東部会

日 時：2005年9月15～16日

場 所：東京農工大学農学部（府中市）

#### ④関西部会

日 時：2005年9月17～18日

場 所：名城大学（名古屋市）

#### ⑤九州部会

日 時：2005年10月6～7日

場 所：九州沖縄農業研究センター（熊本県菊池郡）

＊当初、9月7～8日に立命館アジア太平洋大学（別府市）で開催される予定であったが、台風のために上記のように日程が変更された。

### (2) 部会開催報告

#### ①東北部会

平成17年度東北部会は、9月26日（月）、27日（火）の2日間にわたり、弘前大学創立50周年記念会館を会場に開催され、参加者は90名であった。講演題数は29題で、講演内訳はウイルス・ウイロイド病関係17題、糸状菌病関係11題、細菌病関係2題で、連日活発な質疑応答が行われた。一日目の講演終了後、部会幹事会続いて懇親会が開催された。懇親会は同大学の会館食堂において80余名の参加者を迎えて盛大に行われ、会員間の懇親が大いに深められた。部会幹事会では庶務報告、会計報告の後、幹事の選出、次年度の開催地などが審議・了承された。次期部会長には、部会会則に基づき部会幹事の選挙により、東北大学の池上正人氏が選出された。平成18年度の部会は山形県の山形大学で開催することが承認され、開催地幹事には生井恒雄氏が承認された。これらの審議・承認案件は、2日目の午前最初に行われた部会総会で提案・審議され、全て承認された。2日目の講演終了後には若手会員によって企画された若手の会発表会が行われ、講演題数8、参加者30名で活発

な討論が行われた。本年度からパワーポイントによるプレゼンテーションが行われたが、特にトラブルもなく盛会俥に部会を終了することができた。会員諸氏のご協力に感謝する次第である。(池上正人)

## ②関東部会

平成17年度関東部会が、9月15日(木)、16日(金)の2日間、東京農工大学農学部(東京都府中市)において開催された。講演題数は昨年よりも増えて58題、その内訳は防除関係9題、ウイルス病関係16題、宿主反応関係6題、細菌・ファイトプラズマ関係6題、菌類病関係21題であった。参加者は約270名(一般約160名、学生約90名、永年・名誉会員約10名、賛助会員約5社)に及び、熱心な討議が行われた。1日目夕刻には、同大学福利厚生施設「オリザ」で恒例の懇親会が約90名の参加者を得て開催され、会員相互の親睦が深められた。1日目昼食時に評議員会がもたれ、平成18・19年度は東京農業大学の主催で開催することが了承された。2日目の講演終了後には、若手会員により企画された第3回若手の会が行われ、鳴坂義弘氏(東京学芸大学 自然科学系広域自然科学講座)、松尾広信氏(北興化学工業(株)開発研究所)、吉田重信氏(農業環境技術研究所 農業環境インベントリーセンター)の3シンポジストの講演を約100名の聴衆を得て、活発な討議が行われた。(寺岡 徹)

## ③関西部会

平成17年度関西部会は、9月17日(土)、18日(日)の両日にわたり、名城大学天白キャンパスにて開催され、参加者は約200名であった。総講演題数は78題で、内訳は糸状菌病関連52題、植物保護関連8題、細菌病関連8題、ウイルス病関連10題であった。部会運営は、開催地委員長の道家紀志氏、幹事の川北一人氏、実行委員の稲垣公治氏を中心に、関係各氏のご協力により周到に準備されており、会期全般を通じて活発な質疑応答が行われた。一日目の講演発表終了後、名城大学の「タワー75」15階レセプションホールにて懇親会が盛大に行われ、名古屋市を広範囲に見渡せる眺望のもとで、会員相互の親睦を深めることができた。部会役員会は、第一日目の午前中に名城大学天白キャンパス内にて開催され、行事、役員の交代、庶務・会計報告、次年度の開催計画等が審議・了承された。平成18年度の関西部会長選挙結果が報告され、次期部会長には露無慎二氏が選出された旨の報告があり、了承された。また、平成18年度の部会は、開催地委員長奥野哲郎氏、開催地幹事三瀬和之氏により、京都大学で開催される旨了承された。これ

らの審議・了承事項は、同日午後の部会総会で提案・審議され、すべて承認された。総会終了後、一般講演に先立ち、部会長講演(香川大学、山本弘幸)として「生体防御における脂質過酸化経路の役割」が行われた。(山本弘幸)

## ④九州部会

平成17年度の九州部会は例年通り、九州農業試験研究機関協議会(九農研)との共催で、9月7日(水)、8日(木)に大分県別府市にて開催の予定であったが、台風14号の直撃によって、昨年に引き続き開催を急遽延期せざるを得ない事態となった。その後取り急ぎ関係機関との調整を図り、10月6日(木)、7日(金)の両日にわたり、熊本県の九州沖縄農業研究センターにて開催する運びとなった。講演題数は31題で、内訳はウイルス・ウイロイド病関係11題、細菌病関係2題、菌類病関係11題、防除薬剤関係7題であった。突然の日程変更により参加者は例年より若干少なかったが、熱心な討議が行われた。昼食時に開催された幹事会では、役員の交代、会計報告、次年度の開催計画等が審議され、これらの案件は引き続き開催された部会総会ですべて承認された。翌7日には第30回九州部会シンポジウムが開催され、鹿児島大学農学部の中村正幸氏による「植物病原糸状菌の病原性因子ーペクチン分解酵素による病原性発現機構ー」、果樹研究所カンキツ研究部の伊藤隆男氏による「カンキツが保毒するウイロイドの現状と対策」、ならびに大分県農林水産研究センター安全農薬研究所の山崎修一氏による「弱毒ウイルスを利用したサツマイモ帯状粗皮病の防除」の3題の話題提供があり、活発な論議が行われた。(上運天博)

北海道部会については、次号に掲載いたします。

## 【関連国際学会開催状況】

### 1. 第2回アジア植物病理学会印象記

#### 開催までの経過

2005年6月25日から28日まで、シンガポール国立大学で第2回アジア植物病理学会(Asian Association of Societies of Plant Pathology: AASPP)大会が開催された。2000年に中国・北京で開催された第1回大会では、2003年にインドネシア・バリ島で第2回大会を開催することが承認されたが、爆弾テロ事件が発生し、急遽シンガポールで開催されることとなった。当初は2004年に開催される予定であったが、SARS騒ぎによって1年延期せざるを得なかった。

第1回大会では、AASPP会長に中国のZeng教授、副会長に次期開催予定国インドネシアのHadi教授、臨時

副会長に久能、幹事長に中国の Tang 教授が選任された。2003年ニュージーランドで開催された ICPP の会期中に AASPP の臨時評議員会が開かれ、第 2 回大会をシンガポールで開催することが決定された。このためシンガポール国立大学 Wong 教授も新たに副会長に選任され、2004年から開催準備が開始された。シンガポールは植物病理学のスタッフが手薄なため、同教授は中国農業大学の Peng 教授にプログラム編成を依頼した。2004年秋に各国の植物病理学会のホームページにリンクする形で第 2 回大会 (ACPP) ウェブサイトで開催案内が示された。国際学会では通常パンフレットで案内が出されるが、経費節減のために今回は当初からインターネットで通知することとなった。我が国でも部会や大会の開催時に宣伝に努めたが、周知することはなかなか難しかった。それでも、2004年11月末の期限までに約180の講演申込みがあった。講演数を増やすために期限を12月末まで延長し、最終的に200件以上の申込みがあったようである。12月には Tang 幹事長より、基調講演と座長の日本側候補者のリストを提出するよう要請があったため、米山会長のご指示で各分野の主だった方に候補者を推薦していただき、年末には中国のプログラム委員会に送付した。国際学会やシンポジウムでは、少なくとも開催半年前にはプログラム編成や座長依頼などがあるはずであるが、本年3月になってもウェブサイトには発表されなかった。そこで、4月上旬に久能が急遽北京を訪れ、Tang 幹事長および Peng プログラム委員長と準備督促の協議をした。驚いたことに、この時点までプログラム委員会はほとんど活動しておらず、講演申込み者と題目を順番に並べたリストをもっているだけであった。勿論セッション別の整理、座長候補者の選別などは全く行っていなかった。2日間の協議を終えて早朝の便で帰国の途についたが、まさにその日から北京で反日デモが始まった日であった。

開催まで2ヶ月半しかなかったため、このまま放置すると開催が危ぶまれるため、AASPP 設立に尽力された大内先生のお力添えを得て、中国側から提示された講演リストをもとに口頭発表セッションの組立て、座長候補者、ポスターセッションのジャンル別配列などを約2週間で終え、プログラム委員会と開催地の Wong 副会長とに送付した。その後座長の入替え、セッションの修正などが多少行われたが、最終的には日本側の原案がほぼ採用され、プログラムが5月下旬にやっとウェブサイトを示された。講演要領、ポスター作成要領などは6月初旬になって初めて掲載されることとなった。この間、中国、シンガポールとメールで連日連絡し、やっと開催にこぎつけたという次第である。Wong 教授もプログラム委員会は頼りにならずと、最後の

詰めは日本側と専ら行っていたようである。

日本からの参加・講演申込みは当初100件を超えていたはずであったが、あまりの準備遅れのため旅費申請などができず参加を断念された方が多く、誠に残念であった。この間、多くの参加予定者からプログラム内容や座長予定などの問合せが寄せられたが、ここに記した事情により、満足にお答えできず大変申し訳なく思っている。この場をお借りして改めてお詫び申し上げたい。

#### 評議員会の協議

大会に先立って25日に各国代表による評議員会が開催された。AASPP に加盟している国は14カ国あるが、代表が退いても後任を決めていなかったり、メールで連絡しても応答なし等の理由で、会議に出席したのは8カ国9名であった。規約には評議員会の成立条件がないため、辛うじて過半数を超えた状況で協議を開始することとした。Zeng 会長は体調不良で本大会を欠席するため、会議の全権は久能に一任すると既に昨年末に通知されていたため、非力ながら議長を務めざるを得なかった。第1会 ACPP 以降5年間に当初承認された規約にいくつかの不具合が生じてきた。第1は、副会長は次期開催の責任者であるため大会の運営に手一杯の状況で、会長を補佐する副会長が欠かせないようになった。特に、今回のように健康上の理由などで、会長が不在の場合には補佐役の副会長なしでは AASPP の活動は麻痺状態になる。そこで、副会長の追加案を提案したところ、全会一致ですんなりと承認されたが、その選任法について意見が分かれ次期評議員会に付託されることになった。また、AASPP の事務局は次期開催国におくことになっていたが、大会運営と AASPP 全体の問題を同時に解決することは困難とのことで、次期会長が委嘱した事務局は2期6～7年間役割を担ってもらうこととした。その他、構成学会からの会費徴収の是非、常設ニュースレター、ホームページの開設、学会誌などについて協議されたが、いずれも資金が必要なため、結論が得られず継続審議となった。わずか2時間足らずの時間で、お国事情から様々な意見がでてくる議題の結論を得ることは極めて難しい。次期会長は、これらの問題を解決するために特別委員会を設置する意向を表明したが、AASPP の運営がインターネットに頼りすぎており、しかも加盟国すべてと常に連絡できる状態でないので、委員会を設置しても結論を得るまでに相当な苦労があると予想される。新たに設置される事務局と次期幹事長を中心として運営法を見直す必要がある。当初参加を表明した国々でも母体学会の所在が不明でかなり不安定な状況にあり、各国代表が退職・転職して連絡がと

れなくなるケースが多いため、代表を推薦する母体学会と常に連絡がとれる体制を築くことも大切である。アジア地域の学会として参加国が多いに超したことはないが、欧米並に責任体制が整うまでは、積極的に参画する国々の協議に委ねる以外に AASPP を維持することは難しいと考えざるを得ない。なお、日本植物病理学会の推薦により、静岡大学露無教授を次期評議員として登録した。

今大会閉幕間際にイスラエル植物病理学会が正式加盟を申請してきたため、日本として異存ないと回答した。各国の意向を次期会長がとりまとめることになっているが、恐らく他の国々も承認すると予想される。

### 大会の概要

今回の大会では、エクスカージョンとディナー以外はすべてシンガポール国立大学のキャンパスが使用された。同大学は街の中心部から車で15分くらいの距離で、緑豊かな広大な面積に各学部、施設が整然と並んでいる近代的なキャンパスである。2005年は創立百年目にあたり、100の学会、学術講演会などを大学主催で開催するとのことであった。我々の ACPP が最初の開催行事であるため、開会式には若い女性市長が歓迎の挨拶を行った。会場となった理学部は学科ごとに区画化された建物をもっており、近代的な視聴覚設備を備えた教室、セミナー室、会議室が至るところに見られた。通路には大きなテーブルとベンチが並んでおり、すぐそばの電源にコンピューターをいつでも接続できるようになっており、学生の勉学、談笑にはもってこいの場を作っていた。建物は機能的で、学生の教育に細かい配慮をしているように見受けられた。これ程の広大な面積と豊かな施設、機器を備えた大学は日本でお目にかかったことはない。

経過で述べたように大会開催までには幾多の苦労があったが、29カ国から240名が参加した。参加人数の多い順から中国(61名)、日本(42名)、シンガポール(25名)、イラン・韓国(16名)、インド(14名)で、それ以外は10名未満であった。口頭発表は9つのセッションに分かれて計130題がプログラムに掲載されていたが、各会場でキャンセルがかなりあったため実際は110題程度と思われる。ポスター発表も118題がプログラムに載っていたが、実際には70題程度であった。実質2日間で7つの会場に別れていたため、全体にゆったりとした雰囲気での発表、討議が行われた。

ウイルス病、細菌病、菌類病、生物防除分科会の印象を、下記の専門の各先生方にとりまとめて頂いたので、ご一読いただきたい。(久能 均)

### ウイルス・ウイルス病分野

ウイルス病分野は、最初に Palukaitis 博士(英国)の CMV に対する植物の抵抗性とそれに対するウイルス側の対抗機構に関する総会講演で幕を開けた。植物の RNA サイレンシングと CMV によるそのサプレッションなどを中心に、ウイルスがそのゲノムを進化させることによって植物の抵抗性反応に対抗して行く戦略が明解に示された講演であった。ウイルス病分野では講演発表が約30題、ポスター発表が約20題行われた。その多くは、韓国の *Freesia mosaic virus* (FreMV) や *Maracuja mosaic virus* (MarMV)、中国の *Wisteria vein mosaic virus* (WVMV)、インドの *Pigeonpea sterility mosaic virus* (PPSMV) など、アジア各国で見出されたウイルス病の発生生態やそれら病原ウイルスについての PCR やゲノムシーケンスなどに基づいた分類・同定に関する発表であった。中でもモーリシャスの *Banana streak virus* (BSV) のゲノム配列が多様性に富んでおり、また、このウイルスゲノムが宿主ゲノムに組み込まれることが抵抗性育種を難しくしているとの報告は誠に興味深いものであった。一方、ウイルスゲノムの機能解析や宿主因子の解析などの分子生物学的研究に関しては、*Tomato leaf curl Java virus* の DNA  $\beta$  が病徴発現に関わるという池上正人教授(東北大)の講演や、クロロパ葉脈黄化ウイルス(CIYVV)に対するエンドウの抵抗性には翻訳開始因子 eIF4E が関与しているという上田一郎教授(北大)の講演など日本の研究者による発表を除けば、シンガポール大学によるサブゲノム RNA プロモーターの解析などハイビスカス退緑斑ウイルス(HCRSV)に関する一連の報告、中国の広西大学によるトマトからの TOM3 遺伝子の単離とその RNAi による TMV 増殖の阻害、中国農業大学によるコムギ縞萎縮ウイルス(WYMV)の感染性 cDNA の構築やサトウキビモザイクウイルス(SCMV)の N1b 遺伝子導入による同ウイルス病抵抗性形質転換トウモロコシの作出などの発表が目につく程度であった。なお、ウイルス病分野の発表者には日本の大学に留学中もしくはその指導を受けた研究者が数多く見受けられ、日本のアジアにおける植物ウイルス研究のリーダーとしての貢献の大きさを改めて認識し、大変頼もしく感じられた。今後とも、こうしたアジア諸国との研究の協力・連携関係を強化して行くことがますます重要となろう。(日比忠明)

### 原核生物・細菌病分野

細菌病関連の講演は分科会に分散していたので、全てを聞く事が出来なかったが、特に印象深かった発表のいくつかをご紹介します。宿主一病原菌の分科会では、ま

ず、中国の He らが、サリチル酸経路とオーキシン経路の相互作用に *Asr1* 遺伝子の役割について発表した。 *Arabidopsis* の本遺伝子の構成的生産株とノックアウト株を作成して、 *Pseudomonas syringae* 各株に対する品種特異的抵抗性誘導を詳細に検討したもので、大変感銘を受けた。日本からの発表で特筆すべきは、岡山大学の一瀬らによる *Pseudomonas syringae* の鞭毛に関する研究で、特に glycosylation が病原性に不可欠であることを、詳細な糖鎖の解析と種々変異株を用いて見事に示していた。この一連の研究は、既に Ann. Rev. Phytopathol. でも詳細に紹介されており、世界的にも評価の高いもので、聴衆一同を魅了した。この他にも、 *Xanthomonas campestris* pv. *campestris* では、DSF (Diffusible Signal Factor) による誘導遺伝子群の解析 (シンガポール)、網羅的病原性関連遺伝子の解析 (中国)、イネ白葉枯れ病菌では、Avr エフェクター分子を用いた対応 R 遺伝子の単離 (シンガポール、中国) 等の科学的に質の高い研究が目まぐるしく進んだ。いずれも、世界中で展開されているホットな課題に果敢に挑戦し、最新の分子生物学的手法をふんだんに用いた研究であった。アジアにおいてもゲノム、ポストゲノム時代の到来を示すもので、科学立国を目指した国を挙げての強力なバックアップを感じ、大変感激した。この分野での遅れが指摘される日本を超える意気込みさえ感じた。Prokaryote Disease のセッションでは、アジア諸国において問題となっている Phytoplasma・細菌による病害の紹介、新しい診断法などについて、また、Biological control のセッションでは、細菌を Biocontrol agent としたものの、細菌病防除を対象としたものなど、興味ある報告が種々あった。総じて、第一回 ACP の発表内容のレベルから格段の進歩があったことと、講演のキャンセルが厳しく排除され整然とした進行であり、ACPP が本格的な国際学会に発展しつつある事を強く感じた。(露無慎二)

### 菌類病分野

菌類病は口頭22題、ポスター30題の計52題の発表であった。地域的には中国が発表の4分の1を占めていたが、イランの発表が中国とほぼ同数でイランの研究者の意欲的な参加、発表があったことが印象に残った。中東地域の植物病害についてはこれまで縁遠い思いがあったが、イネ、ジャガイモ、ヒヨコマメ、ピスタチオ、キウイ、サトウキビからニレの立枯病やナラタケ病などの樹病にまでおよぶ幅広い菌類病の研究報告があった。この地域の農業振興に対する意気込みを感じることができた。その他、インド、日本の発表が1割程度を占めていた。アジア地域の植物病理学

会かつ開催地がシンガポールであるということから、オーストラリアやニュージーランドのオセアニア地域の発表もいくつかみられた。オーストラリアはブドウ酒用のブドウの生産が活発であるが、近年、*Colletotrichum acutatum* や *Greeneria uvicola* による新しい腐敗性の病害が多発し、問題になっているとの報告があった。効果的な薬剤防除の適用が望まれているが、農薬の残留性を考慮した対策法について活発な意見交換があった。その他、アジア諸地域の地域的特性に応じて、野菜類、穀類、ココナツ、アマなどの多様な植物の病害に関して報告があった。菌類病を対象とした感染機作分野の報告は日本を中心とする疫病菌、アルタナリア菌、いもち病菌、うどんこ病菌、炭疽病菌を用いた研究報告が先行的な研究成果を得ているという印象をもった。また、いもち病研究においてはゲノム情報を利用した研究スタンスが中国において確立されつつあるとの印象を得た。今後、日本側研究者と相互に情報交換をしながら共同研究を進めていくことがアジア植物病理学の発展に重要と感じた。(久保康之)

### 生物防除分野

生物防除のセッションでは口頭発表15題とポスター発表12題があった。口頭発表の国別内訳は中国6題、日本4題、タイ、インド、スリランカ、イラン、パキスタン各1題だった。また、ポスター発表の内訳は中国6題、タイ2、日本、イラン、オーストラリア、バングラデシュ各1題だった。国別の発表数は概ね国別の参加者数を反映したといえる。ただ、口頭発表とポスター発表を合わせても27題しかないのには驚いた。また、講演会場は100名は収容できる広さがあったにもかかわらず、参加者は30名ほどしかなく、これが本当にアジアの植物病理学会なのだろうか疑問を持ったのは事実で、ちょっと拍子抜けした感は拭えなかった。一方、発表者のほうは逆にリラックスできたかもしれない。各講演ともほぼ時間通りにスムーズに進行した。さて、発表内容を見てみると、有用微生物を用いての生物防除効果を示したものが16題と圧倒的に多く、発表の6割を占めていた。対象病害は多岐に渡り、用いた有用微生物もそれぞれ異なっていたが、*Bacillus* spp., *Pseudomonas* spp., *Trichoderma* spp. を用いたものが11題と多かった。その他としては、内生菌類、内生放線菌、拮抗性酵母、植物生育促進菌類、非病原性 *Agrobacterium vitis* などを用いた発表もあった。これらの防除機構の多くは競争、抗生、誘導抵抗による。生物防除効果以外の発表としては、*Alternaria* spp. から抽出された“plant activator protein”が各種の植物の生育を促進するとともに抵抗性を

誘導するとされ、中国ではすでに市販されているとの報告があった。その他、植物生育促進菌類の *Penicillium* spp. による抵抗性誘導に関わるシグナル経路が複数存在するという報告や、植物からのアレロパシーを利用して土壌病害を防ぐというアジア特有の取り組みの発表もあり、興味深かった。  
(百町満朗)

#### 【学会ニュース編集委員コーナー】

本ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを主旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せ頂きたいと思っております。

投稿宛先：〒170-8484 豊島区駒込1-43-11

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX: 03-3943-6086

または下記学会ニュース編集委員へ：

松山宣明、加来久敏、夏秋知英、堀江博道、富岡啓介、各委員宛

#### 編集後記

学会ニュース第32号をお送りします。毎年この時期には各種研究集会や学会部会等の開催報告が集まって参ります。学会員の国内外でのご活躍と学問の隆盛ぶりが示され頼もしくまた喜ばしく存じます。第2回教育プログラム、第41回植物感染生理談話会、第23回植物細菌病談話会、北海道部会を除く各部会開催報告が寄せられております。開催地関係者のご尽力、ご協力に一学会員として心から御礼申し上げます。また、国際学会関連の記事としては第2回アジア植物病理学会印象記があります。国際学会とくにアジアにおける開催の難しさや問題点がよく分かりました。久能均先生のご奮闘ぶり、お見事です。（松山宣明）

#### 会員のご逝去

名誉会員伊藤一雄氏は平成17年10月1日にご逝去されました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。